

日本語教育用デジタルコンテンツ開発報告

岩崎言語教育プログラム開発代表

岩崎 美紀子

mikiko@ilpd.jp

1. はじめに

2003年 CIEC 外国語教育研究部会より発行された『最新外国語 CALL の研究と実践』に記したとおり ([実践報告]62頁 - 103頁) 筆者は平成12年度及び平成13年度の2年間に2社からの依頼により合計3つの日本語教育用 e-Learning 教材を作成した。どれも筆者が独自に開発した日本語教育システム

「Mikiko Iwasaki's Systematic Japanese (以下「MISJ」と略す)」をもとに作成した教材であるが、上記報告執筆時点においては MISJ の効果についても、e-Learning 教材の効果についても客観的に記述できる材料がなかった。しかし、平成15年11月から12月にかけて、各方面のご協力によりベトナムのハノイ及び東京に於いて様々な事項の検証を目的としたトライアルレッスンを実施することができた。本稿では、この2つのトライアルの結果報告を通して MISJ の効果、筆者の作成した e-Learning 教材(以下「本 e-Learning 教材」と略す)の効果及び有効な使用方法について述べたい。e-Learning 教材の内容については上記のとおり既に報告済みであり、かつ下記 URL からサンプルがご覧いただけるので、本稿では詳述しない。

http://www.ilpd.jp/misj/eL_sample/JaBL/index.html

2. 本稿に関わる e-Learning 教材

MISJ Welcome Program in e-Learning^[1]

完成時期 平成13年8月

概要 独習可能な導入用日本語教育プログラム

原素材 MISJ Welcome Program

3. MISJ について

本 e-Learning 教材は筆者が十数年かけて確立した MISJ の対面教育にほぼ100%準拠している。MISJ は筆者が2, 3年の実践を通して抱いた問題点の解決を目標に、趣味の延長として一切参考文献無しにゼロから開発した教育システムであり、初級から中級まで一貫している、教師養成システムとしても機能するなど極めて独自性が高い。このシステム開発の経緯、筆者の言語観、言語教育観等に関しては『最

新外国語 CALL の研究と実践』の[実践報告]の第3章(64頁~78頁)で詳述したので、ここでは概略のみ紹介する。

3-1. MISJ の特徴

媒介語(種類は問わない)を積極的に使用する。構造も文化的背景も異なる言語を自由に操れるようになるには、文法及び物の考え方、とらえ方などの文化的背景の理解が不可欠との考えに基づく。

極めて効率性が高く効果的である。

独自の文法理論とメソッドにより、短期間で確実に「話す、聞く、読む、書く」の4技能をバランス良く身につけることができる。

楽しく学習できる。

レッスンごとに着実に会話能力向上が実感できるので楽しい。

3-2. MISJ の文法理論

中級レベルまでの日本語表現を、「主体的に文を作り、会話を進める話し手の視点」で分析。日本人とのコミュニケーション及び常体(「である調」)文章の読み書きに不可欠な文法要素を見極めたうえで、すべてを明快に説明できる理論を確立した。

3-3. 習得内容

本 e-Learning 教材の原素材である MISJ Welcome Program (12 レッスン) 修了後に習得が期待できる能力は以下のとおりである。

挨拶、自己紹介、注文、買い物(6桁以上の金額も言える)、タクシーの乗り方などの実用会話能力。

整った単文を用い、家族、日常生活、旅行などを話題とした知的で自然、かつ主体的な日常会話能力。

仮名文字(清音及び濁音の1部)の読み書き能力。

単文と接続詞を用いた作文能力。

3-4. MISJ の効果

トライアル実施以前の十数年間に多数行ってきたプライベートレッスンを通して、少なくとも Welcome Program の有効性は立証済みであった。

4. トライアル報告(1) 於東京

4-1. 目的

MISJ の効果の検証。

グループでも筆者以外でも実行可能なことの検証。

e-Learning 教材と対面教育の効果的な使用法。

4-2. 実施時期

授業：2003年11月19日～12月5日(3時間×12)

筆記及び会話テスト：2003年12月8日

4-3. 学習者の募集及び募集要項

在日外国人をメンバーにもつ組織の協力を得てメールを配信、以下の条件をつけて参加者を公募した。

11月19日～12月5日の期間(週末、祝日を除く12日間)連続してレッスンを受けられる者。

学習に専念でき、かつ e-Learning 教材が使用できる環境にある者。

学習経験がゼロ、もしくは限りなくゼロに近い者。

ビデオ撮影及び撮影した映像の公開に同意する者。

4-4. 参加者リスト

	年齢	性別	国籍	学習経験
A	31	女性	オーストラリア	2時間
B	23	男性	スイス	ゼロ
C	26	女性	シンガポール	3時間
D	28	女性	ドイツ	10時間

4-5. 参加者の資質

初日の授業のみ筆者が担当した。通常通り学習者の能力判定を同時に行い、申し送り事項とした。

	音感	発音	理解力	記憶力
A				
B				
C				
D				

学習者 A の資質が他の学習者に比べやや劣り、かつ学習に専念できる環境が失われていたため不安材料はあったが、相対的に粒ぞろいのクラスであった。

4-6. 学習状況

12日間のプログラムの受講状況は以下のとおりである。(レッスン後の自習時間は自己申告)

	平均自習時間	出席日数	作文課題提出数
A	3-4時間	11日	7
B	1.5時間	11日	ゼロ
C	3時間	12日	6
D	2時間	12日	9

学習者 A は自分の力不足を初日にきちんと自覚したと思われる。レッスン後十分な復習をした。1日頭痛で欠席したものの午後は回復、e-Learning で学習したとのこと。学習者 B は、資質は高いが作文の課題提出もないなど努力不足は明白である。ただし、後述(6-1.)のとおり、すべて本人の責任とはいいがたく、教師の対応で改善できた可能性は高い。

4-7. 成果

4-7-1. 目的 について

プログラム修了後、週末を挟んだ12月8日(月)に会話と筆記のテストを行った。学習者 B は文字学習が充分ではなかったため、筆記テストは行わなかった。会話テストは、筆者だけでは客観性に欠けると判断し、OPI^[2]の公式有資格者にもテストを依頼した。学習者にはまず OPI のテストを、次に筆者との会話を、待ち時間に筆記テストを受けてもらった。

	OPI の判定	筆者の評価	筆記
A	初級(中)	80%	60%
B	初級(中)	40%	0%
C	初級(上)	70%	80%
D	中級(下)	100%	95%

学習者 A と C の会話能力の判定結果が OPI と筆者では逆転しているが、それは筆者のテストが修了テストであり、MISJ のプログラム内容が通常の初心者用教科書と一致していないためと思われる。

なお、OPI のテストは有料であり、また2度受けてもらう時間的余裕のある学習者は一人もいなかったため、この評価は正式なものではない。しかし、有資格者の評価であり、OPI テスターの資格はもっていないが研修を受けた筆者自身の判断としても学習者 D に与えられた中級(下)の判定は妥当と思われる。たった12日間の授業成果で望める評価としては最高のものと言える。

参加者の資質からみて、相応の努力と適切な授業運営がなされていれば全員初級(上)の判定がもらえる可能性があったと思われる。また Welcome Program の内容を完璧にこなせば、OPI の評価基準からみて中級(下)の判定がもらえる可能性も高いと以前から思っていたので、学習者 D の判定は筆者にとって特に予想を超えるものではない。しかし、今回実際にこのような判定が出たことにより、MISJ の効果はもちろん、MISJ がグループレッスンでも確実に効果を発揮できることが客観的に確認できたと言えるのではないだろうか。

授業、会話テストすべてを録画し、参加者から公開の許可を得ているため、PC カンファレンスにおい

て、中級(下)の判定を受けた学習者Dの会話能力を皆様に見ていただく予定である。また4日目以降提出された作文やテストのコピーも参考資料として配布する予定なので、MISJの効果をぜひご確認ください。なお、学習者Dはトライアル受講以前に10時間の学習経験を申告しているが、仮名文字の学習のみで、会話能力は全く無かったと明言している。

4 - 7 - 2 . 目的 について

前述(4 - 4 .)のとおり、筆者自身は最初のレッスンしか担当していない。後の11日間は6名の教師が交代で担当した。全員グループレッスンは初めて、教師養成修了後ほとんど実践経験のない者も2名含まれていた。したがって、筆者以外の者でもMISJを効果的に実行できることが証明できたと思われる。

4 - 7 - 3 . 目的 について

開発時に設計書を作成する段階から、以下の3点に関しe-Learning教材の限界を感じていた。

インターアクティブ性の限界

文法、文化的特徴の理解、ドリル訓練などは可能だが、仕上げの会話の相手はまだ機械では無理。

使ってもらえる保証がない

「いつでも好きな時に学習できる」という利点は、裏返せば「自発的に学習時間を確保しなければ学習してもらえない」という欠点になる。

正しく使ってもらえる保証がない

どんなに工夫を凝らしても、正しく使ってもらえなければ最大の効果は期待できない。

したがって、e-Learning とクラスレッスンをどのように組み合わせるかを考える際、まず e-Learning を予習教材として使用、クラスレッスンを会話中心で進めるのが理想的だと考えた。しかし、実践開始後すぐに、機械相手の独習では習熟度に大きな個人差が生じることが判明。効果の立証が必須の状況下で、こうした授業を続けるのは危険と判断し、4日目以降は e-Learning を復習教材に切り替えた。

4名中Aを含む2名が1日ずつレッスンを休んだにもかかわらずプログラムの進行に問題が生じなかったことから考えて、本 e-Learning 教材は復習用、補習用教材としては非常に効果的だったと言える。

5 . トライアル報告(2) 於ハノイ

5 - 1 . 目的

MISJ が実行可能なクラス規模の検証。

MISJ の効果の検証。

開発時に対象と考えていた若くて優秀でやる気のある学習者の学習潜在能力の見極め。

5 - 2 . 実施時期

授業：2003年12月1日～5日

e-Learning 試聴・会話テスト：2003年12月6日

5 - 3 . 学習者の募集

このトライアルはハノイにある貿易大学^[3]、慶応大学、ベトナム科学技術庁付属機関で日本の通産省(現経済産業省)の支援により完成したばかりのイーラーニングセンター^[4]のご協力により実現した。学習者の募集は、11月下旬に施設及び状況を事前視察した結果、貿易大学にお任せすることにした。

5 - 4 . クラス規模及びスケジュール

滞在予定を1週間としたため、1日6時間×6日間(合計36時間)受講可能な学習者を希望したが、不可能であることが判明した。そこで午前と午後1クラスずつ、合計2クラス設定することになった。

午前クラス(18名) 8時半～11時半

9月初旬から既に日本語を第一外国語として選択し学習している一年生のうち、努力をしているにもかかわらず多少遅れ気味の学生18名を選抜

午後クラス(6名) 2時～5時

第一外国語として英語を選択し、第二外国語として日本語に興味をもっている3年生6名

5 - 5 . 実施場所

当初イーラーニングセンターの使用を予定していたが、視察の結果、

施設がMISJの会話主体のレッスンには合わない

大学から遠すぎて大学の授業を並行して受ける学生達の負担が重過ぎる

の理由により最終日のみの使用で了承していただき、授業そのものは大学構内にある日本語科の教室をわせていただいた。午前クラスの人数18名は、この教室の規模に合わせて設定したものである。

5 - 6 . 参加者の資質

貿易大学はベトナムでも優秀な学生の集まる大学であり、日本への関心も高い。特に午後クラスの6名は日本語学習経験がゼロであり、媒介語として英語の使用が可能、若く、優秀でなおかつ意欲もある、正に筆者が一度は教えてみたいと願っていた資質の持ち主の集まりであった。唯一の困難は発音であったが、午前クラスの18名も加え全員に見られる傾向であったため、ベトナム語の音声の複雑さに起因するものと思われる。短期間の授業のなかで解決できる問題ではなく、状況的にもさして重要な問題ではないとの認識で授業を進めた。

5 - 7 . 成果

5 - 7 - 1 . 目的 について

教室の許容量に合わせて今回は 18 名となったが、ほぼ通常通りの授業を行うことができた。その結果、全員が視野に入る規模であれば、それ以上でも MISJ の実行は可能という感触を得た。

5 - 7 - 2 . 目的 について

ハノイに於いてはまだ個人で e-Learning 教材が使える環境は整っておらず、カセットテープの使用すら危ぶまれる状態、しかも実質授業時間は 3 時間×5 日(計 15 時間)という厳しい条件であった。この目的の対象は事前経験ゼロの午後クラス 6 名である。結果的に学生達の学習潜在能力は筆者の予想を遙かに越えていた。大学の授業を受けながら、しかも音声付き復習教材は無しという状況であったにもかかわらず、文字を除き Welcome Program で習得可能な日本語能力の 8 割相当を習得させることができた。作文例(3 日目の宿題)

(原文表記はごく一部を除きローマ字、内容はママ)

私はフィエンです。ベトナム人です。学生です。

私は朝勉強をします。昼ピザを食べます。でもスパゲッティは食べません。夜ニュースを見ます。---

6 . e-Learning について

6 - 1 . 効果

本 e-Learning 教材の効果は、東京でのトライアルにより、立証することができたと考えられる。

4 名中 2 名が 1 日ずつレッスンを休んだが、大きな支障なくプログラムを修了することができた。

学習者 A は、資質的に他の学習者より多少劣っている面があった上に 1 日レッスンを休んだにもかかわらず、Welcome Program で期待できる日本語会話能力の 80% を習得することができた。

後日トライアル報告書作成のため、収録したすべてのビデオを検証した結果、ドリル訓練を大量に含む通常の対面授業への切り替え指示を出したにもかかわらず、担当教師全員が適切に対応できなかったことが判明した。筆者はテスト前日までハノイでトライアルを行っており、出発後の確認、修正は不可能だったのである。しかし、作文、OPI 及び筆者の会話テストの結果にその不都合は現れなかった。したがって、結果的にみると、そうした不都合が本 e-Learning 教材によってほぼ完全にカバーされていたことが確認できたことになる。

ただし、本 e-Learning 教材は確立された教育システム MISJ に準拠したものであるため、この結果が

そのまま他の一般的な e-Learning 教材にもあてはめられるとは言えない。

6 - 2 . 使用法

4 - 7 - 3 . で述べたとおり、e-Learning を予習教材として使うことは、少なくとも毎日授業が行われる状態では危険である。また、以前鹿児島大学に於いて完全独習用教材として使用したケースでは、学習に専念できる環境にあったにもかかわらず同程度の内容を修了するのに 3 ヶ月以上を要した。つまり、e-Learning を効果的に使うためには、最低でも何らかの形のペースメーカーが必要ということであろう。東京でのトライアルに於いても、理想的な授業ではなかったとはいえ、少なくとも連日の授業がペースメーカーの役割を果たしたと言える。

また、ハノイでの e-Learning 試聴で気づいたのは、語学学習に不可欠な「声を出して練習する」訓練の重要性である。約 2 ヶ月半一般的な授業を受けた午前クラスの学習者と 5 日間ではあるが口頭練習を大量に伴う MISJ 独特の授業を受けた午後クラスの学習者の間では、e-Learning の使用法に著しい違いが見受けられた。前者は度重なる注意にもかかわらずほとんどが音を聞くことに専念し、後者はたった 1 度の指導で「聞く・話す」ことが同時にできた。

7 . 終わりに

これまで MISJ の有効性を客観的に証明する機会を得られずにいた筆者にとって、2 つのトライアルは非常に大きな意味をもつ。

第三者に有効性を判断してもらえる材料を手に入れることができた。

MISJ を普及させることの重要性を再確認できた。この機会を与えてくださった方々、トライアルに参加してくださった方々に心から感謝の意を表したい。なお、このトライアルの後援者である(株)クレデンシャル総合研究所が、成果を記録した DVD を作成してくださった。ご興味のある方は下記までご連絡いただきたい。 misj@credential.jp

注

[1] 許諾を受け、(株)東芝ソリューション社が著作権を有する「英語で学ぶ日本語 Japanese Language Basic Program」を「MISJ WELCOME PROGRAM in e-Learning」として販売中

[2] 米国で開発された会話能力テスト Oral Proficiency Interview の略称。詳細は <http://www.opi.jp>

[3] FOREIGN TRADE UNIVERSITY

[4] VIETNAM IT EXAMINATION AND TRAINING SUPPORT CENTER (VITEC)